「熊谷空襲を体験して」岡部玲子氏

昭和 8（1933）年、熊谷市に生まれた岡部さんは、昭和 20 年 8 月、熊谷市立石原小学校 6 学年在学中、熊谷空襲を体験されました。学校生活や空襲での体験を中心にお話しいただきました。

《学校や生活》戦争が始まるとスカートからもんぺへ、履物は靴から下駄になり、最後には手作りのわら草履となった。上着も夏冬通して長袖。国語は「ヘイタイススメ」、歴史は神話の入ったもの。歴代天皇名や教育勅語を意味もわからず暗唱した。夏休みの宿題は干し草づくり。紙もなくなり、新聞紙を揉んでちり紙の代用にした。鼻をかむとインクで色が付き、子供同士で大笑い。

《食糧事情》配給制になり、いつもお腹すかせてよく桑の実を食べた。芋粉や乾燥芋が配給されたが、不味いこと天下一品だった。大豆の絞りかすも配給されたが毎回下痢をした。カイコの蛹、煎って食べた。母が農家に着物等をもって食糧と交換しにいった。白いご飯を食べたいばかりに田植等手伝いに行った。辛いこともあったが、真っ白いおにぎりをくれた。これが世界一おいしかった。

《熊谷空襲》昭和 20 年。敵機がたびたび襲来。救急袋と防空頭巾をたすき掛けにして登校するようになる。警戒警報が鳴ると帰宅、空襲警報だと帰れないから近くの側溝に入って解除を待つ。防空壕に避難するとき、機銃掃射も受けた。母が後ろから見ていたが、飛行士の顔がはっきり見えるほど低空だったとか。8 月 14 日、熊谷空襲の日、熊谷ではお盆の祭りを各家庭でやっていた。ほおずきを飾って、水をはったどんぶりに萩をうかべ、ござをひき、おはぎを作り、午後はみんなと遊んでいた。夜 11 時頃、いきなり空襲警報、爆音が聞こえた。防空壕に飛び込むのが精一杯。ものすごい雨が降ってきたが、実は石油だった。その後焼夷弾がきた。入り口の隙間がすさまじい音とともに明るくなった。戸を開けると外は火の海。大勢の人の悲鳴や怒号が聞こえ、悪夢の一夜だった。友人の一家が防空壕で全員亡くなった。家は残ったが、辺り一面焼け野原になった。

《終戦》終戦の日。ラジオは聞かなかった。あとで知った。一番うれしかったのは夕方電気がついたこと。電灯カバーを外して、家中駆け回って明るい明るいって喜んだ。9 月初め学校が始まった。でも荒川に泳ぎに行った男の子が不発弾に触れて爆死した。

《終わりに》私たち子供は戦争に振り回されて過ごしてきた。爆撃で亡くなった友人を思い出すだけで未だ涙が出る。戦争の話は体験した者にとり辛く、悲しい。でも、この体験は引き継いでいかなくてはならない。

（講演の内容は、「資料館だより」から転載しました。）